1～3 歳児における正の共感的反応

――年齢的変化や共感対象者の検討を踏まえた母親への面接調査――

植田　瑞穂・桂田恵美子

問 題 と 目 的

子どもは日常生活において，他者の様々な感情に触れる。例えば，Strayer（1980）は大学のデイケアセンターにおいて，4 歳児と 5 歳児の感情表出を観察し，ポジティブな感情が最も多く生起していることを示している。さらにこの研究では，ある児のポジティブな感情表出は，他児のポジティブ感情やポジティブな声かけを引き起こしやすいことが明らかになっている。つまり，幼児期においては日常的に，他者のポジティブな感情を目撃する機会や，それに対応する機会が多いと言える。

このような相手の経験に対する見る側の反応に関係した一連の構成概念を共感（empathy）と呼び（Davis, 1994/1999），今日まで様々な研究が進められている。人間においては，生後間もなくから特に相手のネガティブ感情に対する共感の存在が指摘されており，幼少期の共感の発達的変化が論じられている。Sagi & Hoffman（1976）は，生後 1 日の新生児が他の乳児の泣き声を聞いて自らも泣き出すような感情伝染の現象を報告している。Hoffman（2000/2001）によると，この反応は極めて原初的で自動的なものであるが，発達に伴い泣きのコントロールが進むとともに，子どもは自分と他者の区別を理解できるようになる。そしてそのことにより，他者の苦痛に対して自動的に苦痛を示すような反応は少なくなり，他者の苦痛状況を理解しようとしたり，他者を慰めたりできるようになる。

Hoffman（2000/2001）によって主張されたこの時期の共感的反応の発達的変化は，その後多くの研究において，母親や実験者のネガティブ状況に対する子どもの反応を観察することによって実証されている（e.g. 植田・桂田，2020；Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman, 1992）。例えば植田・桂田（2020）では，母親の苦痛に対する子ども自身の苦痛や恐怖といった，相手と類似した感情を示すような反応は 1 歳から 2 歳以降にかけて減少していくのに対し，認知的に苦痛を理解しようとする仮説検証的な行動（hypothesis-testing）や，同情的な表情や発言などで示される被害者への共感的配慮（concern for victim）などは，この時期に得点が高くなっていくことが示されている。さらに，母親の苦痛状況に対する声かけや援助を行う子どもが 1 歳から 2 歳にかけて増加する傾向にあることが示されており，被害者への働きかけの観点からも大きな発達的変化があることがわかっている。この時期における子どもは自己指向的な共感反応から他者指向的で向社会的な共感反応へ移行する時期であり，両者が混在したような多様な反応のレパートリーを示すといわれている（Moreno, Klute, & Robinson, 2008）。

このように，幼児期における共感的反応の発達の様相が明らかになってきているが，これらはあくまで他者の苦痛などネガティブ状況に対する反応のみを扱っており，他者のポジティブ感情に対する反応の発達については明らかになっていることが少ない。数少ない研究の中で，Sallquist, Eisenberg, Spinrad, Eggum, & Gaertner（2009）は，他者のポジティブな情動や状態を理解することによる幸福または喜びの表出である正の共感（positive empathy）について，母親の報告による尺度の作成や，実験者のポジティブ状況における子どもの反応の観察を行っている。ただし，この研究では発達的な変化は検討されていないことに加え，正の共感の感情的側面のみに焦点を当てているため，他者のポジティブ状況に対する子どもの喜びや笑いなどの限られた反応しか捉えていない。しかし，これまでに明らかになった他者のネガティブ感情に対する共感的反応の発達過程からは，正の共感に関しても幼児期に大きな発達的変化がみられる可能性があると考えられることから，子どもはポジティブ感情以外に

も多様な行動のレパートリーを示す可能性がある。そのため，正の共感を感情的側面からのみ定義するのではなく，仮説検証的言動など認知的側面や，共感対象者への働きかけなどの行動的側面も踏まえ，子どもの多様な反応を観察する必要がある。

さらに，幼児期の共感に関するこれまでの研究では，実験室などの統制された環境や（e.g. 植田・桂田，2020；Moreno et al., 2008），日常生活の特定の場面において子どもの共感的反応を観察することが多かった（e.g. Strayer, 1980）。しかしこれらはあくまでも限られた文脈における反応を切り取ったに過ぎず，子どもの共感の全体的な様相を捉えているとは言いがたい。Hoffman（2000/2001）は，子どもは 1 歳頃から 2 歳以降にかけて，自他分離の発達とともに，様々な状況での他者の感情や要求に正確に反応できるようになると述べている。実際に，他者のネガティブな感情に対する共感については，共感対象者の感情が生じた状況や，共感対象者が誰かということによって反応が異なることが指摘されている（e.g. Vaish, Carpenter, & Tomasello, 2009；Young, Fox, & Zahn-Waxler, 1999）。このことから，子どもの共感的反応の生起には共感場面の文脈や状況は重要であり，特に明らかになっていることの少ない正の共感については，日常生活全般における反応を包括的に捉える必要があると考える。

そこで本研究では，1～3 歳児の日常生活における正の共感的反応の様相を明らかにすることを目的とし，母親へのインタビュー調査を行う。特に，この時期における反応の年齢的な変化や，共感対象者による差に着目する。

方　　法

調査対象児

1 歳児から 3 歳児の計 8 名を対象とし，母親にインタビューを行った。Table 1 に調査対象児の月齢，性別，きょうだい構成，幼稚園・保育所等への所属，母親の年齢，母親の就業形態を示した。調査対象者の決定に際しては，ま

ず近隣の子育て支援施設および保育所において本研究とは別の実験への参加応募に関する掲示を行った。応募者の中から子どもの月齢を考慮した上で本調査への参加を追加で依頼し，母親の同意が得られた場合にのみ調査を行った。

手続き

調査対象児の母親に対し，日常生活における他者の感情表出への子どもの反応について，半構造化面接法によるインタビューを実施した。本研究では，子どもの正の共感的反応を包括的に捉えるため，共感的反応を以下のように定義した。(1) 他者の感情が示された後，または他者の感情が予測できる時に子どもが示す反応である。(2) 他者の感情以外の刺激への反応や，他者から子どもへの関わりとしての感情への反応を除く。(3) 共感対象者への否定的または拒否的な反応を除く。

面接全体の内容は，(1) 母親の共感性に対するイメージ，(2) 他者のネガティブな感情に対する共感的反応，(3) 他者のポジティブな感情に対する共感的反応，(4) 共感性とは真逆だと思われる反応（攻撃や回避など）から構成された。本研究ではそのうち，(3) 他者のポジティブな感情に対する共感的反応のみを対象として分析を行った。

他者のポジティブな感情に対する共感的反応について母親から聞き取るにあたり，本研究では Robinson & Zahn-Waxler（2002）の子どもの共感的反応の評定システムを参考に，母親に質問する行動のリストを作成した。この評定システムは National Institute of Mental Health で開発された，他者のネガティブ感情に対する幼児の共感的反応の評定法を発展させたものであり，これまで多くの研究がこの評定システムを用いている（e.g. Moreno et al., 2008）。本面接ではこのシステムのうち，正の共感的反応とも共通すると考えられる観察項目を参考に，視線を向ける・今していることを中断する・共感対象者に近づく・言葉をかける・共感対象者を見ながら声を上げる・何があったのか知ろうとするといった行動を質問リストに含めた。さらに，他者のポジティブな感情に対して生じ得るその他の行動として，共感対象者を見て声を上げ

Table 1　調査対象児の基本属性

対象児	月齢	性別	きょうだい構成	幼稚園保育所等	母親の年齢	母親の就業形態
A	24（2 歳）	男	無	無	36	無職
B	17（1 歳）	女	兄（3 歳）	無	31	無職
C	18（1 歳）	男	無	無	34	育児休業中
D	42（3 歳）	男	無	企業内保育所	33	パートタイム
E	31（2 歳）	女	妹（0 歳）	無	32	無職
F	35（2 歳）	女	無	無	32	無職
G	13（1 歳）	女	無	無	33	無職
H	45（3 歳）	男	無	幼稚園	42	無職

て笑うまたは微笑む・口角を上げるまたは目を細める・拍手やハイタッチをするといった行動も加えた。

面接においては，まず母親による子どもの正の共感的反応に関する回想を促すために，子どもが他者のポジティブ感情に出くわす頻度と，誰のどのようなポジティブ感情に出くわすかを尋ねた。その後，そのような時に子どもがどのような行動を取ったことがあるかを尋ねた。本研究の共感的反応の定義から，母親が挙げた行動のうち子どもの正の共感的反応であると考えられる行動について，それは誰のどのような感情に出くわしたときに見られるか・いつもそのような行動を取るか・行動の激しさ・行動の長さ・行動の早さについて尋ねた。さらに，母親が自発的に思い出せない子どもの反応についても聞き取るため，上記の行動リストのうち母親が自発的に挙げていない行動の有無について尋ね，最後に他に思い出した反応はないか尋ねた。これらについても，母親が自発的に挙げた行動と同様，詳しく聞き取りを行った。

なお，質問内容に関する母親の理解を促進するため，面接全体においてタブレット端末を用いて質問の内容を母親に逐一示した。面接内容は母親の同意のもと録音し，分析対象とする他者のポジティブな感情に対する共感的反応に関する質問の部分について，録音された内容から正確な逐語録を作成した。

分析方法

発言の抽出　逐語録から「子どもの正の共感的反応の内容」および「共感対象者」に関する発言内容を抽出し，意味の判別が可能な単位に文章を分割した。発言の省略などで単独の文章ではどうしても意味の判別が難しい場合は，括弧書きで文脈を補足した。主観的判断を避けるため，抽出および補足作業は両著者で行った。なお，各共感的反応に関する他の情報については，本研究では分析対象としなかった。

カテゴリーへの分類　抽出された文章について，両著者によって KJ 法により内容をカテゴリーに分類した。各文章について類似した内容をまとめ，カテゴリーを作成した。カテゴリー間に類似点が認められる場合は，さらにカテゴリーをまとめてより抽象的な上位カテゴリーを作成し，上位カテゴリーを構成するカテゴリーを下位カテゴリーとした。

カテゴリーへの分類後，各上位カテゴリーおよび下位カテゴリーに評定の基準となる定義を設けた。抽出された各発言が各カテゴリーに該当するかということについて，心理学の研究者 1 名が独立に判定を実施した。上位カテゴリー評定後，それぞれの上位カテゴリーごとに下位カテゴリーを評定し，それぞれ KJ 法での分類との一致率を算出した。一致率は，全調査対象児について抽出した発言の総数のうち，カテゴリーの分類が完全に一致した発言数の割合として算出した。その結果，「正の共感的反応の内容」の上位カテゴリー分類の評定一致率は 85.65% であり，各上位カテゴリー内での下位カテゴリー分類の評定一致率は 79.17%～100% であった。また，「共感対象者」の上位カテゴリー分類の評定一致率は 88.51% であり，各上位カテゴリー内での下位カテゴリー分類の評定一致率は 97.22%～100% であった。なお，独立して行われた判定が KJ 法での分類と一致しなかった場合には，協議を行い全員が納得する形で決定した。

共感的反応と年齢・性別・共感対象者の関連の分析　カテゴリー分類の確認後，「正の共感的反応の内容」の各カテゴリーについて発言のあった人数を，年齢および性別ごとに算出した。さらに，両著者が独立に再度各調査対象児に

関する逐語録を読み，調査対象児ごとに各カテゴリーの正の共感的反応がどの共感対象者に生じているかを評定した。一致率の算出にあたっては，全調査対象児のカテゴリーの総数のうち，「共感対象者」の評定が両著者で完全に一致した割合を算出した。その結果，一致率は 88.16% であった。両著者の評定が一致しなかった場合は，協議を行い両名が納得する形で決定した。なおこの評定に当たっては，「正の共感的反応の内容」と「共感対象者」どちらについても，下位カテゴリーと，単一の下位カテゴリーで構成される上位カテゴリーを組み合わせて評定した。

結　　果

「正の共感的反応の内容」の概念カテゴリー

「正の共感的反応の内容」について，8 つの上位カテゴリーを設定した。(1) 感情的反応：ポジティブな感情的変化や，表情や身体へのポジティブ感情の表出。(2) 接近・接触：共感対象者に接近または接触する。(3) 視線を向ける・見る：共感対象者や，共感対象者のポジティブ感情の原因となるものを見る。(4) 仮説検証：共感対象者がポジティブ感情を示す状況やその原因を調べたり，聞いたりする。(5) 音声的・言語的反応（笑い声・興奮した声以外）：笑い声や興奮した声以外で何らかの発声や発言がある。(6) 共感対象者との活動の共有（感情表出以外）：共感対象者の活動を模倣したり，活動や会話に参加したり，参加したいと主張したりする（感情表出の模倣は含まない）。(7) 称賛・賛辞：行動や言葉で称賛したり賛辞を伝えたりする。(8) 自身の活動の中断：自身がそれまで行っていた行動を中断する。

さらに，下位カテゴリーとしては，以下の 19 カテゴリーを設定した。①声を上げて笑う：笑い声に関する記述がある。②微笑む：声を上げずに笑う。③共感対象者と一緒に笑う：「一緒に」という文言が含まれる，またはそれと同意である。④その他の笑い：「声を上げて笑う」，「微笑む」，「共感対象者と一緒に笑う」に含まれない笑い，またはどのように笑っているのか記述のない笑

い。⑤身体的・感情的興奮：活動の参加以外で，身体的な活動や感情的高ぶり，それに伴う発声などの記述がある。⑥何があったのか見る（観察による仮説検証）：何があったのか見て知ろうとする。⑦その他の視線：仮説検証的な記述がない視線。⑧何があったのか聞く（言語による仮説検証）：何があったのか聞いて知ろうとする（e.g.「どうしたの？」または「なんで笑ってるの？」と聞く）。⑨特定不能の仮説検証：仮説検証の手段に関する記述がない。⑩発声（言語的内容なし，笑い声・興奮した声以外）：笑い声や興奮した声以外で，言語的な内容のない発声がある。⑪共感対象者とのポジティブな感情またはポジティブな状況の言語的共有：共感対象者に対して，ポジティブな感情やポジティブな状況を言語的に伝え共有する（e.g.「良かったね」と言う）。⑫第三者との言語的共有：共感対象者の感情やそれに対する自身の感情について，第三者に報告したり，言語化したりして共有する（e.g. 共感対象者について「喜んでるね」と教える）。⑬特定不能の音声的・言語的反応：言語的内容やその有無が不明，またはどこにも分類できない音声的・言語的働きかけ。⑭活動への参加の主張：活動に参加したいと言ったり，参加するために何かを言う。⑮会話への参加：会話に混ざろうとする。⑯言語的称賛・賛辞：すごい，おめでとうなど，共感対象者に対する言語的称賛や賛辞。⑰活動への参加：遊びなどに混ざろうとする（e.g. 遊びに混ざろうとしていく，後ろをついて走り回る）。⑱活動の模倣：共感対象者と同じことをする（e.g. 真似をする，同じ行動をする）。⑲拍手：拍手や手を叩くことに関連した記述がある。

Figure. 1 に各上位カテゴリーおよび下位カテゴリーの関係について概念図を示した。なお，行動リストに用意していた「ハイタッチ」については，調査対象児全員について有無を尋ねたものの，正の共感的反応として見られると答えた母親はいなかった。

「共感対象者」の概念カテゴリー

「共感対象者」について，（1）家族，（2）家族以外の子ども，（3）家族以外の親しい人，（4）見知らぬ人，（5）テレビの中の人，（6）特定不能の人の 6

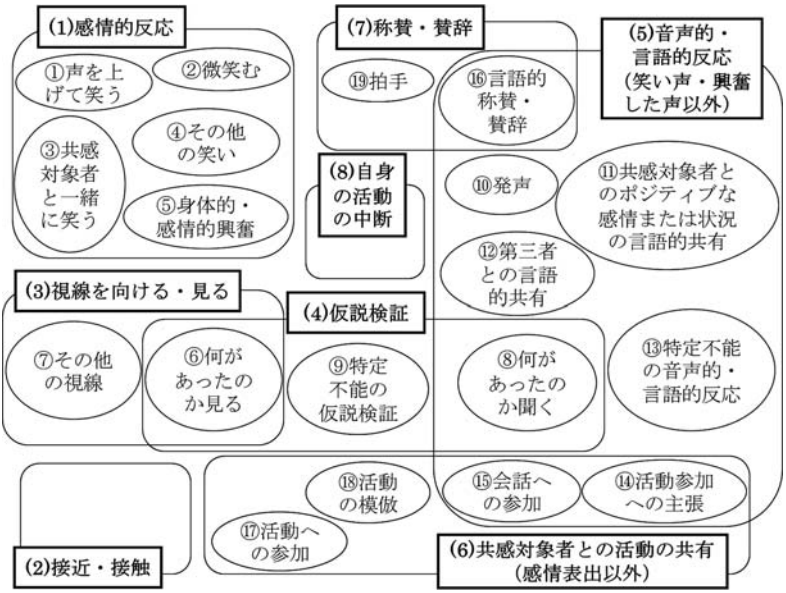

Figure 1 「正の共感的反応の内容」の概念図

つの上位カテゴリーを設定した。(3) 家族以外の親しい人については，家族以外で親しさに関する記述がある，または家族以外である程度親しい距離感であると思われる場合に評定した。また，「みんなが」「誰かが」など，共感対象者が評定できない場合は，(6) 特定不能の人に評定した。さらに下位カテゴリーとして，①両親，②年上のきょうだい，③年下のきょうだい，④家族以外の年上の子ども，⑤家族以外の年下の子ども，⑥同年代または特定不能の子ども，⑦テレビの中の子ども，⑧その他テレビの中の人の 8 つを設定した。「お友達は」「他の子が」など，共感対象者の子どもの年齢が特定できなかった場合は，特に共感対象者の年齢的な要因を考慮する必要がないと判断し，同年代とまとめて⑥に評定した。

年齢および性別による正の共感的反応の比較

「正の共感的反応の内容」の各上位・下位カテゴリーについて，それぞれの

反応が認められる子どもの年齢および性別ごとの人数を Table 2 に示した。表から明らかなとおり，感情的反応，接近・接触，視線を向ける・見る，音声的・言語的反応，称賛・賛辞については，ほとんどの調査対象児が日常生活において示したことがあった。一方，仮説検証的な言動や共感対象者との活動の共有の有無については，年齢を通して個人差が認められた。更に，自身の活動の中断は 1 歳および 2 歳において認められた。

感情的反応のうち，声を上げて笑う反応や身体的・感情的な興奮は男児について言及されることが多かった。また，声を上げずに微笑む反応は 1 歳児のみに認められた。仮説検証的な言動については，何があったのかを見るような観察による仮説検証は 1 歳のみに認められる一方，何があったのかを聞くような言語による仮説検証は 35 ヵ月児以上において認められた。また，そのうち 2 名については共感対象者や第三者との言語的な共有や，言語的な称賛も行っていた。一方，言語的内容のない発声については 1 歳および 2 歳のみに認められた。さらに，共感対象者が行っている活動へ参加する行動は，2 歳後半および 3 歳の子どものみについて言及があり，そのうち 2 歳の女児 2 名については活動の参加を言語的に主張する行動も認められた。活動の模倣は 1 歳および 2 歳のみについて言及があった。拍手については全調査対象児が日常生活において示したことがあった。

正の共感的反応と共感対象者

Table 3 に，各共感的反応が認められる子どもの人数を共感対象者別に示した。「正の共感的反応の内容」については，下位カテゴリー間で大きな差が見られなかったため，上位カテゴリーを使用し，「共感対象者」については，下位カテゴリーと，単一の下位カテゴリーで構成される上位カテゴリーを組み合わせた分類を用いた。全体として，両親や，家族以外の子どもが挙げられることが多かった。特に感情的反応は両親をはじめとした家族にほとんどの子どもが示し，次いで家族以外の子どもや親しい人物について示されていることが多かった。また，接近・接触や音声的・言語的反応については，両親をはじめと

Table 2　各共感的反応が見られる子どもの年齢および性別ごとの人数

カテゴリー	総人数	1 歳（3 名中）	2 歳（3 名中）	3 歳（2 名中）	男児（4 名中）	女児（4 名中）
感情的反応	8	3	3	2	4	4
声を上げて笑う	5	2	1	2	4	1
微笑む	2	2	0	0	1	1
共感対象者と一緒に笑う	7	3	2	2	4	3
その他の笑い	6	3	2	1	3	3
身体的・感情的興奮	4	2	0	2	3	1
接近・接触	7	3	3	1	3	4
視線を向ける・見る	7	3	3	1	3	4
何があったのか見る	2	2	0	0	1	1
その他の視線	7	3	3	1	3	4
仮説検証	5	2	1	2	3	2
何があったのか見る（同上）						
何があったのか聞く	3	0	1	2	2	1
特定不能の仮説検証	2	2	0	0	1	1
音声的・言語的反応	7	3	2	2	3	4
何があったのか聞く（同上）						
発声	4	3	1	0	1	3
共感対象者とのポジティブな感情またはポジティブな状況の言語的共有	2	0	1	1	1	1
第三者との言語的共有	2	0	1	1	1	1
特定不能の音声的・言語的反応	1	1	0	0	0	1
活動への参加の主張	2	0	2	0	0	2
会話への参加	1	1	0	0	0	1
言語的称賛・賛辞	2	0	1	1	1	1
共感対象者との活動の共有	5	2	2	1	2	3
活動への参加の主張（同上）						
会話への参加（同上）						
活動への参加	3	0	2	1	1	2
活動の模倣	3	2	1	0	1	2
称賛・賛辞	8	3	3	2	4	4
言語的称賛・賛辞（同上）						
拍手	8	3	3	2	4	4
自身の活動の中断	3	1	2	0	1	2

Table 3　各共感的反応の共感対象者別人数

	両親	年上のきょうだい	年下のきょうだい	家族以外の年上の子ども	家族以外の年下の子ども	同年代または特定不能の子ども	家族以外の親しい人	見知らぬ人	テレビの中の子ども	その他テレビの中の人
感情的反応	7	1	0	0	0	4	2	0	0	2
接近・接触	5	0	1	2	0	6	1	1	0	0
視線を向ける・見る	4	0	0	0	0	3	1	1	0	1
仮説検証	3	0	0	0	0	3	1	0	0	0
音声的・言語的反応	5	1	1	1	1	5	2	0	1	2
共感対象者との活動の共有	2	1	1	1	0	3	0	1	0	0
称賛・賛辞	2	1	1	0	0	6	1	0	1	0
自身の活動の中断	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0

注．共感対象者が特定可能であった場合のみ評定。また，一つの反応カテゴリーについて複数の共感対象者が挙げられている場合を含む。「正の共感的反応」については上位カテゴリーを使用し，「共感対象者」については，下位カテゴリーと，単一の下位カテゴリーで構成される上位カテゴリーを組み合わせた分類を用いている。

した家族や家族以外の子どもが共感対象者として挙げられることが多く，接近は特に年上の子ども，音声的・言語的反応は特に親しい人に対してが多かった。さらに，共感対象者との活動の共有や称賛・賛辞については友達やきょうだいに対するものが多く，次いで両親に対するものが多かった。

考　　察

本研究は，これまで明らかになっていることの少ない正の共感について，1～3 歳児の日常生活における共感的反応の様相を明らかにすることを目的とした。母親へのインタビュー調査を行い，他者のポジティブな感情に対する子どもの反応を抽出したところ，感情的反応や認知的反応，行動的反応を含めた様々な行動が抽出された。このことから，1～3 歳の幼児は，日常生活においてほとんどの子どもが他者のポジティブ感情に対する反応を示した経験を持つことが示唆された。特に，相手と類似した感情を示す，見る，近づく，声や言葉をかける，称賛するなどの反応は，年齢を問わず多くの子どもが示すが，その他の細かな行動の表れ方は年齢や性別によって異なり，正の共感的反応には

多くのレパートリーがあることが明らかになった。

具体的には，何があったのかを知ろうとするような認知的な試みは年齢を通してみられるが，1 歳児においては観察によるものであるのに対し，3 歳前になると言語的に共感対象者に尋ねるような，より高度な仮説検証的行動が観察されることがわかった。本研究で参考とした Robinson & Zahn-Waxler（2002）などの評定システムでは，この反応が 5 段階で評定できるようになっており，苦痛を示す共感対象者の顔と患部を見比べるような試みに加え，言語的に状況や他者の感情について尋ねるほど高い得点を獲得する。そして前述の通り，このシステムを用いて他者のネガティブ感情に対する共感を観察した研究では，年齢とともに仮説検証の得点が高くなることが明らかになっている（e.g. 植田・桂田，2020）。つまり本研究の結果は，他者のネガティブ感情に対する共感と同様に，正の共感についても，年齢に伴いこの反応がより高度な内容に変化するという発達過程が見られることを示唆している。また，言語的な仮説検証の他にも，共感対象者および第三者との言語的な共有や，言語的な称賛が年齢とともに見られるようになることが明らかとなり，正の共感的反応は子どもの言語的な発達によってより洗練された反応へと発達していくことが示唆された。

さらに，1 歳ではポジティブな感情を示した相手の活動をただ真似する行動が見られるのに対し，2 歳後半以降になると，その活動へ参加して相手と相互交渉したり，活動の参加を言語的に主張したりするような行動が見られるようになることが分かった。幼児期の遊びを社会的参加の観点から分類した Parten（1932）は，2 歳の前半までの子どもの遊びの中心は，他の子どもの傍で互いに関わらずに同じように遊ぶといった平行遊びであることを示している。しかし，この遊び方は年齢とともに減少し，2 歳後半から 3 歳にかけて，やり取りのある連合遊びやより組織的な協同遊びが増加する。本研究で明らかになった正の共感的反応の発達的変化は，このような社会的能力を反映したものであると考えられるが，さらにこれらの遊びが他者のポジティブ感情に誘発されるものであることを示唆している。

Telle & Pfister（2016）は人間の快楽主義的な原則に基づき，人間は正の共感的反応として生じたポジティブな感情を維持し，さらに延長しようとする欲求を持っている可能性を示している。また，渡辺（2015）は，他者と同時に快を経験することによりその効果が増大するような正の共感の社会的促進といった現象を挙げ，その機能として集団の凝集性を高めることを挙げている。このことから，本研究で明らかになった，共感対象者の活動を模倣したり活動に参加したりするような行動は，共感対象者の感情を目撃することで生起した自身のポジティブ感情を維持したりさらに高めるために取られる行動であり，そのことによって子ども同士の仲間意識の高まりや相互作用の促進にもつながることが考えられる。

また，これらの共感的反応は，幼児期の前半において両親を中心とした家族や家族以外の子どもに示されることが多いことが明らかとなった。その中でも，感情的反応は両親を中心とした家族に，共感対象者との活動の共有や称賛・賛辞については友達やきょうだいなどの子どもに示されることが多かった。Young et al.（1999）は，他者のネガティブな感情に対する共感の観察において，共感対象者が母親であった場合に共感的配慮や向社会的行動などが示されやすいことを明らかにしており，その理由として母親との関係維持の必要性を挙げている。正の共感に関しても，相手のポジティブな感情と類似した感情を示すことによって相手との関係が維持されるような機能があることは充分に考えられ，そのために家族のような親密な相手が共感対象者である時に感情的反応が観察されやすいのではないかと考えられる。

一方，活動の共有に関しては，前述の通り他の子どもとの仲間関係の構築に関する機能を持つため，大人よりも子どもを対象とした場合に生じやすいのではないかと考えられる。また，称賛や賛辞に関しては特に他の子どもが何かを達成した際に見られることが多かった。称賛という行為は，子どもの行動の動機づけの観点から論じられることが多い（e.g. 青木，2005）ことからも，一般的に大人から子どもに対して行われることが多いと考えられる。子どもは日常的に大人から称賛を受けたり，大人が他の子どもを称賛する場面を目撃した

りする経験を積んでいるため，大人よりも自分と同じ「称賛の受け手」の立場である他の子どもに称賛を送りやすいのではないかと考えられる。ただし，子どもの称賛行動は自発的なものとは限らず，他の大人の称賛行動に誘発されている可能性もある。また，複数の子どもに例え同じ反応が生じたとしても，その前後の状況が年齢や共感対象者によって異なることも考えらえる。本研究では各共感的反応が生じた前後のプロセスまでは分析に含めていないため，今後インタビュー内容をさらに分析しその点を踏まえた検討を行う必要がある。

本研究の限界と今後の課題

本研究で分析の対象とした内容は，該当の反応が「見られたことがあるかどうか」ということについてであり，反応が「見られやすいか」ということについては明らかにしていない。そのため，反応の頻度を分析したり，統制された状況において子どもの反応を量的に観察したりすることによって，本研究では捉えられなかった年齢的変化が見出される可能性もある。さらに，本研究では母親へのインタビューを通して子どもの共感的反応を捉えたため，母親の主観的な視点によるバイアスや観察機会の限定性といった問題が影響している可能性がある。そこで今後は，実験室における他者の演技への反応の観察や，幼稚園や保育所での実際の行動観察から，正の共感的反応の発達的変化を改めて検討し，本研究のような日常生活における正の共感的反応と併せて捉えていくことが望まれる。

最後に，本研究では共感的反応の種類によって，反応が生じやすい共感対象者が異なる可能性が示唆された。今後統制された環境での観察を行うにあたっても，共感対象者による差を考慮し，共感場面を設定する必要がある。このように，日常生活場面の検討で明らかになった結果と実験場面における検討で明らかになった結果を相互に取り入れていくことで，幼児期における正の共感をより包括的に捉えることができると考える。

文　献

青木直子（2005）．就学前後の子どもの「ほめ」の好みが動機づけに与える影響．発達心理学研究，16, 237-246.

Davis, M. H.（1999）．共感の社会心理学：人間関係の基礎（菊池章夫，訳）．東京：川島書店．（Davis, M. H.（1994）. *Empathy. A social psychological approach.* Boulder, CO : Westview Press.）

Hoffman, M. L.（2001）．共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで（菊池章夫，二宮克美，訳）．東京：川島書店．（Hoffman, M. L.（2000）. *Empathy and moral development : Implications for caring and justice.* Cambridge : Cambridge University Press.）

Moreno, A. J., Klute, M. M., & Robinson, J. L.（2008）. Relational and individual resources as predictors of empathy in early childhood. *Social Development,* 17, 613-637.

Parten, M. B.（1932）. Social participation among pre-school children. *The Journal of Abnormal and Social Psychology,* 27, 243-269.

Robinson, J. L., & Zahn-Waxler, C.（2002）. *Young child empathy coding manual.* Unpublished manual. Denver, CO : University of Colorado Health Sciences Center.

Sagi, A., & Hoffman, M. L.（1976）. Empathic distress in the newborn. *Developmental Psychology,* 12, 175-176.

Sallquist, J., Eisenberg, N., Spinrad, T. L., Eggum, N. D., & Gaertner, B. M.（2009）. Assessment of preschoolers' positive empathy : Concurrent and longitudinal relations with positive emotion, social competence, and sympathy. *The Journal of Positive Psychology,* 4, 223-233.

Strayer, J.（1980）. A naturalistic study of empathic behaviors and their relation to affective states and perspective-taking skills in preschool children. *Child Development,* 51, 815-822.

Telle, N., & Pfister, H.（2016）. Positive empathy and prosocial behavior : A neglected link. *Emotion Review,* 8, 154-163.

植田瑞穂・桂田恵美子（2020）．母親のネガティブな情動的変化に対する歩行開始期の子どもの働きかけおよび共感的反応．家族心理学研究，33, 86-98.

Vaish, A., Carpenter, M., Tomasello, M.（2009）. Sympathy through affective perspective taking and its relation to prosocial behavior in toddlers. *Developmental Psychology,* 45, 534-543.

渡辺茂（2015）．共感の進化．渡辺茂・菊水健史（編）．情動学シリーズ 1　情動の進化：動物から人間へ．（pp.100-135）．東京：朝倉書店．

Young, S. K., Fox, N. A., & Zahn-Waxler, C.（1999）. The relations between temperament and empathy in 2-year-olds. *Developmental Psychology,* 35, 1189-1197.

Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M.（1992）. Development of concern for others. *Developmental Psychology,* 28, 126-136.

付記

本研究は，文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 27 年度～令和元年度，情動概念の再構築：心理科学の新たな挑戦）の支援により実施した。貴重なご意見を下さった当プロジェクト関係者の皆様，調査にご協力くださった親子の皆様に感謝申し上げます。また，本研究の分析にあたり，奈良教育大学の堀麻佑子先生に多大なご協力をいただきました。心より御礼を申し上げます。

――植田瑞穂　　大学院文学研究科研究員――
――桂田恵美子　文学部教授――